

水辺の賑わい

代表理事 宮村 忠

2月初旬、武蔵水路改築事業竣工式（3月12日）の案内をいただきました。ぜひ参加しようと思っています。「水辺の賑わい」にとって特別の意義があるからです。

武蔵水路は、埼玉県行田市（利根大堰）で取水してから南に14.5km導水して、鴻巣市糖田で荒川に連絡する水路です。昭和39年10月の東京オリンピックに備えて、当時の建設大臣の檄を背景に突貫工事を進め、未完成ながらもオリンピックを乗り切りました。水路は3年後に完成し、東京の水が一息いれました。それとともに、隅田川に初の浄化用水が計上されました。昭和30年代から、東京の風景は、戦後復興どころか、高度経済成長で激しく様変わりしました。当然、水不足が緊急課題となり、断水や水圧低下が日常化し、「東京砂漠」の言葉も生まれました。もう一方で川の水も一挙に悪化、誇り高き隅田川に嫌悪を催したほどです。

そんな隅田川の水辺に手をさしのべたのが、浄化用水を供給した武蔵水路です。完成から50年、さしのべられた手を支えに、さまざまな工夫を続けて、さらに新たな東京オリンピックにも刺激されて、まああの賑わいをとりもどしつつあるようです。

ところが、救いの手をさしのべた武蔵水路も、50年を経ると、老朽化もめだつようになり、一方で、人々

の記憶からは疎くなってしまいます。糅てて加えて、平成7年の阪神大震災をもたらせたような直下型の大地震にも対応できるような必要性が高まりました。ところで改築するといっても、大都市を賄っている水の流れを止めることはできません。大量の水を流しつつ進めながら進めるという、至難の工事となりました。平成4年にスタートしてやっと平成27年度の完成に漕ぎ着けたということです。「水辺の賑わい」の代表格である隅田川の復活に手をさしのべた武蔵水路の再生なのですから、隅田川のみズベリングにかかわる人達が、まず拍手して欲しいものです。

ついでながら、「隅田川の賑わい」については変わりばえしない話題なのですが、「河川と舟」の視点から、少し古い時代の賑わいを紹介します。正月を過ぎたころから、川面に春の名物がみられました。紅白の幕で飾られた舟の集団が、1日2回、賑々しい光景をみせました。この名物には、2つのピークがあって、1つは3月3日前、他の1つは5月5日前です。いずれも隅田川に神田川が合流する上流側、現在の総武線鉄橋付近の人形問屋が軒を並べているところです。前者は雛人形、後者は五月人形の出荷舟団です。1日2回というのが賑わいの特徴です。実は、都市と周辺地域は、2つの舟路があります。1つは、川を下るとき、自然の流れに乗って舟を進め、遡るときは、



版画 「堤防祭—神輿巡業」

帆を張り、人力で引き、所によっては牛・馬を使って舟を遡上させる舟路です。もう1つの方法は、河口から上流側に制約がありますが、1日2回の干潮と満潮にのって舟を航行する方法です。満潮の時に川を登り、干潮で下る航路です。1日2回の一方通行をつかって、新鮮な野菜を都市に運び、鮮魚を河口から郊外に運びます。この範囲が都市をとり囲む近郊農村の範囲です。都市河川の賑わいの大部分は、この舟運の光景になります。

隅田川の春の風物詩は、およそ15kmぐらい上流の、埼玉県越谷市付近の農閑期生産品の輸送の光景です。現在でも生産地と問屋街は、物流方式を変えて継続しています。

1日2回の一方通行の外に、隅田川には、もう1つ特徴がありました。それは、城下町であるにもかかわらず大橋（後の両国橋）・新大橋・永代橋の3橋があったほど、両岸に市街地が形成され、遊漁舟・遊技舟・納涼舟などが賑わいを盛りあげていたそうです。

そんな「隅田川」に、洋式の音楽が添付されました。武島羽衣（作詞）・滝廉太郎（作曲）による歌曲「花」です。武島羽衣・東京音楽学校（現東京芸術大学）教授と滝廉太郎・同助教授のペアで発行された「花」は、明治末期の小学校唱歌から日本中の愛唱歌となって津々浦々にまで伝わりました。なによりも名曲と名文によって「隅田川」は日本人の誇りをつくりあげてきました。華やぐブランドと親しみが日本の母なる川を表してきました。

曲と詞にとどまらず歌手がミズベリングを華やいだ例もあります。

北海道の積丹半島の南側を流れる尻別川は、支笏

洞庭国立公園の羊蹄山（蝦夷富士）をとり囲む形で流れだし、近年外国人スキー客の訪問で話題を呼んでいるニセコを経て、日本海に注ぎます。羊蹄山の南山麓を流れて、ニセコで尻別川に合流する真狩川に河川公園があります。尻別川のパンフレットにも、掲載されていないような真狩川沿いの小さな河川公園です。一人よがりの評価なのですが、村民の高い誇りを映しだしているのが、近年3回ほど訪れました。とても綺麗な河川敷公園で、真狩川が急流ですので、付添いの人に見守られるようにして、子供たちが水遊びをしたり、走りまわっていました。子供たちの遊んでいる近くに対岸との歩道橋が架かっていますが、洪水に備えて流れ橋スタイルになっていました。この公園入口の道路沿いに道の駅真狩フラワーセンターがありました。花をテーマにしながら、多彩な村の生産品も勢揃いしていました。時折人が出入りしていましたが、建物が洒落ているので、かえって閉静に見えました。店の女性によれば、正月とお盆、子供の夏休みや連休の買い物客が主体らしいのです。それだけでは経営が苦しいものの、真狩村の人気者、というよりも真狩村の人達がこぞって応援し、誇りにしている演歌の細川たかし歌手が故郷で複数回のライブを行うようです。その際は、真狩村だけでなく、尻別川を遠く離れた人達も訪れ、大変な賑わいを見せるそうです。フラワーセンターの前にも、舞台が整っていました。公園の中にも、歌う「細川たかし像」があり、5曲選べます。その設定が地域を生き生きとさせているように見えました。たぶん水辺に咲いた人の輪、「ミズベリング」なのでしょう。

少し話題を変え、水害がつくったミズベリングを京都府北側で日本海に注ぐ由良川でのぞいてみます。



堤防感謝のノボリと浸水位（福知山市堤防神社）

平成16年10月の由良川洪水で立ち往生したバスがありました。屋根の上に脱出した乗客が、恐ろしい一夜を明かしたニュースは話題を呼びました。バスの出来事があった上流側に、由良川最大の市街地福知山があり、小さな盆地になっています。水が溜まりやすいところです。戦国時代、明智光秀がここに堤防をつくり、洪水を安定させました。このときの堤防が「水ばね」という水制で、川の中に石の張り出しを設け、水の流れをできるだけ東の対岸側へ押しやるものでした。これは「明智堤」と呼ばれ、現在でも残っています。しかし、下流側の流れは悪く、小さな盆地の中では、氾濫の解決が見い出せないために近世をつうじて苦心はつづきました。技術的に打開策がなく、川沿いは水に強い土地利用をしようと、桑を植えるようになりました。そのため、この地域は、京都府でもっともさかんな桑畑の中心地となります。その桑畑を核にすぐれた生糸産業が起こり、明治時代に機械織りが始まると、綾部にゲンゼという生糸の会社ことができました。このように地場産業も発達しましたが、依然、洪水との格闘はつづきます。特に昭和28年の洪水では、堤防決壊が発生したこともあって、市街地の浸水深が8mを越えました。

そうした洪水に耐えていくために、福知山では水屋が建てられました。水屋は、土を盛ってその上に家を建て、普段は日常生活に不自由がないように下の階で生活し、洪水時に盛り土よりも水位が高くなって家が浸水するような場合には、2階に避難する仕組みになっています。こうした水屋は、利根川や淀川、あるいは木曾川など、全国各地にあります。福知山には、ほかではあまりみることのない3階建ての水屋があります。それほど、浸水深が大きいという

ことです。3階建ての水屋では、一番上に滑車がついていて、洪水で浸水しそうになると仏壇などの大切な家財を滑車で引き上げ、3階に仮置きします。

また、福知山には堤防にくっついた水屋もけっこうあります。盆地の中なので土地に限りがありますが、高さの高い堤防をつくろうとすると、それだけで用地をとってしまって、住むところが少なくなってしまいます。そのため、堤防を細くし、そのうえで家を堤防にくっつけるような工夫をしています。それほど独自の苦勞を強いられたところです。

福知山では明治40年の水害の後に、一大決心をして、土の堤防に工夫をこらして石張りにしました。しかし、昭和2年の丹後地震で、多くの亀裂が入ってしまいました。

そこで、当時の日本ではまだ使われていなかった、鋼矢板を堤防に使いました。福知山の人々は、工事責任者であった岩沢所長に感謝し記憶にとどめるために「岩沢堤」と名付けました。

そして、昭和6年から始まった堤防感謝祭では、御霊神社で神事を行った後、山車が出て明智堤や岩沢堤、水門や橋のところで祝詞をあげ、洪水のときに重要になる水防活動の場所などをめぐります。祭りの夜には、福知山名物の花火大会が開催されます。福知山の花火は、この堤防祭りから始まった治水感謝の花火大会です。昭和12年には、堤防愛護会が発足され、昭和33年、堤防祭りに神輿の市内巡行が始まり、昭和59年には、活動のよりどころとして、御霊神社内に「堤防神社」が建立されました。

堤防への感謝の気持ちは、軽薄ではなく、由良川から受けた恩恵も水禍も、全てをひっくるめて、川と暮らす地域の人々の気概を表しています。



円山川の岩沢堤（福知山市）